

奈良のイメージ形成におけるメディアの影響
－ 和辻哲郎『古寺巡礼』と明治・大正・昭和前期の
観光ガイドブックにおける比較考察－ (2013)
Influence of the media in image formation of Nara:
Comparison consideration in the sightseeing guidebook of Tetsuro Watsuji
"Kojijyunrei" Meiji, Taisho, and the first half of Showa (2013)

◎北廣麻貴

Maki Kitahiro

同志社大学社会学研究科メディア学専攻 Doshisha University, Graduate of Social Studies

要旨…本研究は、和辻哲郎の『古寺巡礼』¹と、1868(明治元)年から1929(昭和4)年の範囲内で出版された観光ガイドブックの内容分析によって、奈良のイメージが形成されるうえでのメディアの影響を考察したものである。

奈良に関する著作は現在まで多々出版されているが、本研究では奈良の観光に関する文献、文化人の著作、奈良の文学作品に関する文献を検討し、読者に与えた影響の大きさから和辻哲郎の『古寺巡礼』を出発点としている。先行研究を参照したうえで『古寺巡礼』の内容分析を行うことによって、『古寺巡礼』は寺院や仏像を芸術的視点から論じ、奈良を芸術都市であると捉えた著作であることが理解できた。続いて、明治・大正・昭和前期に出版された観光ガイドブックの一部を選出し内容分析を行った。奈良に関する観光ガイドブックは多数出版されているが、一定の基準を設けて選出し、和辻が『古寺巡礼』で捉えた芸術都市という奈良の性格に関するキーワードが、各観光ガイドブックにおいても同様に登場しているかということを確認する作業を行った。その結果を、奈良を芸術都市と捉える和辻の見方と比較することによって、奈良のイメージ形成の過程における『古寺巡礼』の影響と、明治・大正・昭和前期の観光ガイドブックというメディアによる奈良のイメージ形成の影響を理解することができた。

キーワード 奈良、イメージ、内容分析、和辻哲郎『古寺巡礼』、観光ガイドブック

1. はじめに

本研究の中心である和辻哲郎の『古寺巡礼』²は、様々な先行研究において、奈良のイメージ形成過程を考察する際に重要な位置にあると述べられており(永島, 1987)(和田萃、安田次郎、幡鎌一弘、谷山正道、山上豊, 2003)、現在も多くの人に読み継がれている著作である。

『古寺巡礼』の特徴は、奈良を芸術的視点から捉えたことにあり、その視点から『古寺巡礼』を論じた先行研究も存在する(鈴木, 2004)。奈良のイメージに関する研究は、観光学および文学的視点に基づき様々な研究が行われているが、『古寺巡礼』が奈良のイメージに与えた影響に焦点を当てて奈良を分析した研究は充分ではないといえる。

本研究は、和辻哲郎の『古寺巡礼』に重点を置き、『古寺巡礼』の性格と明治・大正・昭和前期の観光ガイドブック³との比較を行い、メディアによる奈良のイメージ形成の影響を考察する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、奈良のイメージ形成に大きな影響を与えた和辻哲郎の『古寺巡礼』と、筆者が基準を設けて選出した1868(明治元)年から1929(昭和4)年の範囲内で出版された観光ガイドブック⁵26冊⁶の内容分析による比較を行い、明治・大正・昭和前期の奈良イメージ形成におけるメディアの影響を考察することにある。

『古寺巡礼』と明治・大正・昭和前期の観光ガイドブックを比較した理由は、『古寺巡礼』が印象記⁷でありながら読者に奈良の新たな一面を広く知らせたこと、有島武郎(谷川, 1971)、水原秋桜子(倉橋, 1989)、白州正子(2004)などの文化人が実際に『古寺巡礼』をきっかけに奈良を訪れたという行動が確認できたからである。有島、水原、白州などの文化人は、『古寺巡礼』から奈良のイメージを形成したといえる。そのため、『古寺巡礼』は印象記という性格を持った著作でありながら、観光ガイドブックと同様の役割を果たしていたと考えることが可能である。

3. 先行研究

先行研究において中谷は「観光イメージの構築には、観光ガイドブック、観光パンフ、旅行雑誌、旅行番組などのメディアの影響が大きい」(中谷, 2010)と述べている。そのような都市のイメージに関する研究は多々行われており、例えば山中(1992)のハワイ、多田(2004)の沖縄の研究が挙げられる。奈良に限定して述べると、奈良の文学作品におけるイメージの先行研究は浅田・和田(2001)、観光イメージに関する先行研究は小川(2007)、寺岡(2010)などが挙げられる。

これらの研究において共通するのは、イメージは繰り返し表象されてきたということである。小川(2007)が指摘するように、イメージはメディアによって再生産される。小川は「テキストがテキストを再生産する形で、奈良の表象は輻輳し多重化していくという点が重要だ」(2007)と述べている。寺岡は、奈良の特色は古代表象力が強いことであると述べ、そのような古代表象が立ち上がる過程には「例えば文人、写真家、学者たちによる『奈良＝古代』の表象実践が繰り返し行われてきたことに目を向けなければならない」(2011)と指摘している。さらに寺岡は、文化人が小説・随筆・短歌などの文字情報で古都奈良のイメージを「生産」したと述べている。

小川と寺岡といった奈良のイメージに関する先行研究において『古寺巡礼』について言及したのものも存在するが、それは大きな研究の一部にすぎない。本研究では『古寺巡礼』を軸にして奈良のイメージを論じることを試みる。

4. 研究方法

研究方法は内容分析を用い、和辻哲郎『古寺巡礼』と大正・明治・昭和前期に出版された観光ガイドブックの内容を検討した。『古寺巡礼』を基にして設定したキーワードと出版年などを照らし合わせることによって、その時代における奈良のイメージを検討することが可能であると考えた。

奈良に関する著作は現在まで多々出版されているが、本研究では奈良の観光に関する文献、和辻以降の文化人の著作、奈良の文学作品に関する文献を検討し、読者に与えた多大な影響から和辻哲郎の『古寺巡礼』を中心としている。

観光ガイドブックについては、観光ガイドブックの内容を一冊全て確認できたもの、などといった基準を設けて、奈良県立図書情報館の資料「ガイドブックあれこれ」(2012)を参考に26冊を選出した。しかし、奈良県立図書情報館の資料は蔵書を網羅したものではなかったため、奈良県立図書情報館の資料に掲載されていた観光ガイドブックを参考にキーワードを設定し、蔵書検索サービスによって更なる検索を行った。

和辻が捉えた芸術都市という奈良の性格に関するキーワードが、各観光ガイドブックにおいても同様に登場しているかというを確認する研究を行った。

5. 和辻哲郎『古寺巡礼』と奈良

すでに述べたように、和辻哲郎の『古寺巡礼』が奈良のイメージ形成の過程において重要であることは、多くの先行研究によって明らかになっている。

『古寺巡礼』の内容分析を行うにあたり、『古寺巡礼』の性格について検討した。須賀(2010)の論を参考にし、芸術都市とは「宗教と芸術が一体となって至高の美がもたらされることを体感することができる都市」であると定義付けた。その定義から、以下のキーワードを設定した。キーワードは、「芸術」「美(美術)」「宗教」である。これらのキーワードを基に『初版 古寺巡礼』(全 294 ページ)と『古寺巡礼』の改訂版(全 269 ページ)を分析したところ、初版は「芸術」159「美(美術)」118「宗教」48、改訂版は「芸術」153「美(美術)」107「宗教」47であった。

表 和辻哲郎『古寺巡礼』における内容分析の結果(単位:回)

	『古寺巡礼』 (初版)	『古寺巡礼』 (改訂版)
芸術	159	153
美(美術)	118	107
宗教	48	47

(分析結果に基づき筆者が作成)

以上の結果と須賀による芸術都市の定義「宗教と芸術が一体となって至高の美がもたらされることを体感することができる都市」を比較すると、『古寺巡礼』には「芸術」「美(美術)」という言葉は合計 277 回(初版)、260 回(改訂版)出現しており、宗教という言葉は合計 48 回(初版)、47 回(改訂版)のみ出現している。注釈 2 で述べたように、和辻哲郎『古寺巡礼』には初版と改訂版が存在し、それらを比較すると数点の変更箇所が確認できるが、本研究の分析結果に大差はみられなかった。

以上の分析結果から、和辻と須賀では芸術都市の捉え方が異なるということが理解できる。和辻の示す芸術都市とは、仏像が宗教的な目的で存在するものではなく、芸術作品として存在しているという見方によるものである。仏像という物質自体に変化は無いが、意味の変化が生じていると考えられる。

6. 『古寺巡礼』周辺の観光ガイドブックにおける奈良

続いて、『古寺巡礼』における奈良は芸術都市であるという捉え方と、『古寺巡礼』発表の 1919 年周辺に出版された観光ガイドブックの内容を比較する。本発表では、1868(明治元)年から 1929(昭和 4)年に発表された観光ガイドブック 26 冊を考察対象とした。選出基準については第 4 章で述べた通りである。

選出した観光ガイドブックにおける「芸術」「美(美術)」「宗教」というキーワードの出現回数を分析した結果、『古寺巡礼』の出版後から「芸術」という言葉が徐々に登場していることが理解できる⁸。さらに、選出した 26 冊の観光ガイドブックのタイトル分析を行うと、『古寺巡礼』発表以前には見られなかった『古建築巡礼』(1925)や『奈良京都の古美術建築案内』(1929)といった主に奈良の芸術に焦点を当てたタイトルの書籍が『古寺巡礼』の発表以降に出版されている。以上の結果から、『古寺巡礼』以降、奈良に芸術的な視点が求められ、その視点が文化人に限定されずに一般化してきたと考えられる。

しかし、「芸術」というキーワードはその数は少ないものの『古寺巡礼』以前の観光ガイドブックにおいても出現していることが理解できる。この結果から、奈良のイメージ形成の発端が必ずしも『古寺巡礼』ではないといえる。

7. まとめ

以上の分析から、『古寺巡礼』は奈良のイメージ形成の大きな要因となっていたということと同時に、『古寺巡礼』の発表以前にも奈良を芸術都市であると捉える記述も数は少ないが存在していたことから、『古寺巡礼』は、和辻の個人的な捉え方からではなく、時代の流れの中で形成された奈良イメージの下で書かれた著作であるといえる。これまで先行研究を確認し研究を進めていたなかで、奈良のイメージ形成の原点であったと考えられていた『古寺巡礼』は、歴史的な奈良イメージの形成過程上の一部であったといえる。

しかし、『古寺巡礼』が奈良イメージ形成の発端ではないものの、和辻の奈良を芸術都市と捉える見方が和辻以降の人々に多大な影響を与えたことは否定できない。そのため、和辻の影響が観光ガイドブックにも及び、一般化したと考えることが可能であり重要な点であるといえる。

明治・大正・昭和前期の奈良のイメージは、『古寺巡礼』の影響に加え、観光ガイドブックという出版メディアの影響からも形成されており、『古寺巡礼』における奈良のイメージが繰り返し表象され、明治・大正・昭和前期の観光ガイドブックでのイメージへと繋がっている。和辻もまた『古寺巡礼』以前の著作や時代背景に影響を受け『古寺巡礼』を執筆したといえる。

本研究はあくまでも『古寺巡礼』と、明治・大正・昭和前期に出版された観光ガイドブックという範囲内で論じたものであり、今後はさらに考察範囲を広げたいという詳細な研究を行うことが必要であると考えられる。

補注

¹ 本研究における特に表記のない『古寺巡礼』は、全て和辻哲郎のものを指す。

² 和辻哲郎『古寺巡礼』は、1919年に岩波書店から出版されたが、その後、改訂版が1947年に出版され、初版と改訂版を比較すると数点の変更箇所が確認できる。本研究では、考察対象の時期とのずれはあるが『古寺巡礼』の出版以降の広範囲に渡る奈良イメージの分析を行うため『古寺巡礼』の初版(筑摩書房, 2012)に加え、現在一般化している改訂版(岩波書店, 1991)も考察対象とした。

³ 本研究においてイメージとは、『観光学辞典』(1997)を参照し、「対象地(国、地域など)に対する主観的評価・印象」と定義付ける。

⁴ 観光ガイドブックという言葉は、案内記、案内書、旅行ガイドブック、ガイドブックといったように時代によって様々な呼称が存在するが、本論では「観光ガイドブック」に統一している。

⁵ 奈良に関する観光ガイドブックは明治以前にも出版されているが、本研究では1868(明治元)年から、『古寺巡礼』の発表後10年間である1929(昭和4)年を考察対象としている。

⁶ 選出した観光ガイドブックの詳細なリストは当日配布する。

⁷ 『古寺巡礼』が印象記であることは和辻自身が「改訂序」(和辻, 1991:5)にて説明を行っている。

⁸ 詳細な分析結果については、当日配布の資料に記載している。

参考文献

- 和辻哲郎 (1919) : 『古寺巡礼』(初版)岩波書店
—— (1991) : 『古寺巡礼』(改訂版)岩波書店
—— (2012) : 『初版 古寺巡礼』筑摩書房
- 永島福太郎 (1987) : 『奈良県の歴史』山川出版社
- 和田萃、安田次郎、幡鎌一弘、谷山正道、山上豊 (2003) : 『奈良県の歴史』山川出版社
- 鈴木廣之 (2004) 「和辻哲郎『古寺巡礼』一偏在する『美』一」『美術研究』379, pp1-19
- 長谷政弘 (1997) : 『観光学辞典』 pp71
- 谷川徹三 (1971) : 「古寺巡礼(和辻哲郎)」『一冊の本』雪華社, pp530-531
- 倉橋羊村 (1989) : 「『古寺巡礼』の旅」『秋桜子とその時代』講談社, pp166-185
- 白洲正子 (2004) : 『私の古寺巡礼』講談社
- 中谷哲弥 (2010) : 「フィルム・ツーリズムにおける観光地イメージの構築と観光経験」遠藤英樹・堀野正人『観光社会学のアクチュアリティ』晃洋書房, pp125-144
- 山中速人 (1992) : 『イメージの〈楽園〉 - 観光ハワイの文化史』ちくま書房
- 多田治 (2010) : 「観光を社会的にとらえるエッセンス—沖縄イメージ研究の立場から—」『観光社会学のアクチュアリティ』晃洋書房, pp40-59
- 浅田隆・和田博文 (2001) : 『古代の女—日本近代文学の(奈良)—』世界思想社
- 小川伸彦 (2007) : 「表象される奈良—B面の『なら学』のために—」『奈良女子大学文学部研究教育年報』3, pp27-32
- 寺岡伸悟 (2010) : 「奈良 古代イメージの卓越」安村克己、堀野正人、遠藤英樹、寺岡伸悟『よくわかる観光社会学』ミネルヴァ書房, pp174-175
- 奈良県立図書館 (2012) : 展示資料「ガイドブックあれこれ」奈良県立図書館
- 須賀由紀子 (2010) : 「芸術都市・奈良とフィレンツェの魅力」樺山紘一他『芸術都市の誕生』PHP研究所, pp240-265
- 服部勝吉 (1925) : 『古建築巡礼』木原文進堂
- 膳桂之助 (1929) : 『奈良京都の古美術建築案内』萬國工業會議